

社会のなかのことば—ことばがうつしだすジェンダー

寿岳章子（じゅがく・あきこ）は、「社会とことば」について説明するうえで、「その言語を所有している社会のさまざまな特質は、しばしばその言語にみごとに反映する」という点と、「ことばが人間のありようを規定することもある」という点を指摘している（じゅがく 1979:1）。それは、ことばは社会をうつしだすということであり、社会のなかのことばが、人間の行動に影響をあたえるということである。社会のなかの個人は、ことばを使用しながら、ことばをつくりあげていく。同時に、ことばによって、つくりあげられる。

寿岳は『日本語と女』という本で論じる内容について、つぎのように説明している。

日本語には、日本人が女をどう位置づけてきたか、社会の中にどう組み入れているの問題がことばの節々によくあらわれている面が多々ある。それは単に片々たることばの問題、それは揚げ足取り、などとすましきってはいられない意外に深刻な面があるように思う。

あるいはまた、日本語のありようじたいが実に深刻に女の生き方にかかわってくるという面が、これまた思いもかけぬ程度で存在する。いわば女性史と日本語とのかかわりとでもいうべき面である。…後略…（同上:2-3）

1979年に書かれたこの本で、寿岳はさまざまなことばをとりあげている。たとえば、「女らしさ」「男らしさ」ということばについて、つぎのように述べている。

男にも女にも多種多様の人格、性格があろうのに、わかりきったような单一の特性がそれぞれあるように何となく考えられている。そのあたりは妙と言えば妙である。実際の暮らしの中でこの奇妙なことばは、なかなか強い力を持っている。人はしばしばこの「女らしさ」と称するものによって、行動の制限を受ける。逆に、この語によって人を攻撃することもある。「女らしい」ということばは、褒めことばとして時には随分有効であるが、逆に、「女らしくない」ということばは何かを決定的に否定する。…中略…いわば「女らしさ」ということばは一種のレッテル語としての機能を持っている（同上:6-7）。

これはまさに、寿岳が本の冒頭で指摘している「そのことばがあることによって人間をそのことばのようを作つてゆく、そういう見方をするようになつてしまう」ということである（同上:1-2）。抽象的で、あいまいな概念でしかない「女らしさ」ということばが、実際的な影響力をもち、人を攻撃する道具にもなっている。

そして、そのあいまいな概念が、言語行動として、女性がどのような声やイントネーションではなすのか、どのような語彙を使うのかを規定する。あるときは、よしとされ、あるときは「逸脱」と見なされ、「女らしくない」という非難の目をむけられる。

ことばをかえる、関係をかえる

人は、規範として定着していることに従順でいつづける存在ではない。人間は自由であり、規範をうらぎることに快感をおぼえることもある。ことばをかえていくことで、関係のありかたをかえようとすることもある。たとえば、「夫」に関する表現である。寿岳は「「主人」ということばを拒否する」ことについてふれている。

そこまでこだわらなくともよかりそうなものをという世間の目を十分知つていながら、なおかつ「主人」を使わないことに徹している女性は、老世代にも若い世代にもかなりいる。その人たちはそれぞれに工夫を凝らしている。やや古めかしくは「あるじ」「つれあい」などという。そんな芝居がかったのはちょっと、という向きは「夫」や、名前（姓、名どちらもあるようだ）を使う。そしてその人たちが一様に困るのは、一般に他人の夫について語る場合であるということであるようだ。名前のわからない人の夫について論ずるようなときには、たしかにそれにふさわしい言い方がない、つまり過去の日本の社会では、そういう形で男子配偶者をとらえる目が一般的でなかったということである（同上:91）。

「ご主人」をさけて、「だんなさん」ということがあるが、「だんな」という語にも「主人」的なニュアンスを感じさせるものがある。「おつれあい」といえなくもないが、しっくりこないような気もする。しかしそれは、なれの問題であるだろう。そして、意思の問題でもあるだろう。脚本家の坂元裕二（さかもと・ゆうじ）は、ドラマの脚本で意識的に「夫さん」という語をえらんでいる（『カルテット』『anone』）。テレビドラマというマスメディアでの言語変革は波及効果をもつ。ウェブを検索すれば、つぎのような記事が確認できる。

- ・水本光美（みずもと・てるみ）「ついに「夫さん」がTVドラマに登場！」
(2017年2月7日 <https://tmizumoto.jimdo.com/ジェンダーエッセイ/ついに-夫さん-がテレビドラマに登場/>)
- ・矢部万紀子（やべ・まきこ）「あの坂元裕二が使う「夫さん」、ブラボー！「ご主人」に違和感をもつみなさんへの「福音」として」
(WEBRONZA 2018年3月5日 <https://webronza.asahi.com/culture/articles/2018030500004.html>)
- ・矢部万紀子「続・あの坂元裕二が使う「夫さん」、ブラボー！「違和感」を超えて、どう定着させるか」
(WEBRONZA 2018年3月6日 <https://webronza.asahi.com/culture/articles/2018030500006.html>)

夫さんという語は新しいようでいて、まったく新しい表現というわけでもない。寿岳が1988年に書いた『ことばづかいの昭和史』では「よその人の夫」の呼称について、「やはり「ご主人」が便利で使いがち」であるとしつつ、つぎのように述べている。

でもそれも、さいきんは「おつれあい」とか「御夫君（ごふくん）」とか語る人もかなり出てきているし、びっくりすることには「夫さん」とさえいう人もあります（じゅがく1988:51）。

最近では、「パートナー」という呼称もある。結婚しているかどうかや性別をとわずに使用できるという利点がある。「奥さん」という語をさけたい人にとって、どのような選択肢があるだろうか。妻さん、パートナー、おつれあいなど、関係がかわっていけば呼称もかわっていくだろうし、関係をかえていくために、呼称をかえることもある。

言語教育と性差別

自分が学習している言語に、差別的な表現が多用されていることがある。たとえば、精神障害に関連づけられた語が罵倒語として使用されていることがある。そのような語がその言語社会でひろく使用されている現実があるとしても、自分は使用したくないということはある。しかし、日常の場面で多用される語に、差別的なニュアンスが感じられるときはどうだろうか。「主人」はまさに、そのような語である。『言葉は社会を変えられる』での対談で遠藤織枝（えんどう・おりえ）はつぎのように語っている。

遠藤 …これまで言いたい人だけ言えばいい、言いたくない人は言わなくてもいい、ということで済んだかもしれないけど、日本語を教えていると、外国人にもそれを強制することになる。外国人にも符号だと思って言っている人もいるだろうけど、意味を知ったら言いたくないという人もいますよ。夫婦で日本語の先生をやってる中国の女性が、夫は日本だと「主人」と言われて威張れるから喜ぶけれど、私はいやだって言う。もう一人、韓国のは、日本に、こういう主従関係を表す言葉が残っているのに驚いたし、自分は使いたくないから使わなかつた。そうしたら、あなたは日本語を知らないねと言われた、と言うんです。その人は大学院で日本語を勉強している優秀な人で、自分の日本語のレベルだと、「主人」を使うのがいちばん自然で見合っているから、それを使わざるを得ない、それが嫌なんですと言っていた。少し広い目で見ていくと、日本人だけの日本語じゃないんだし、日本人だけの「主人」じゃないんだ、ということですね（うさみ編1997:67-68）。

非第一言語話者があまり定着していない表現を自覚的に選択するとき、「ことばを知らないから」だと誤解されやすい。その人なりの問題意識が無化され、たんに知識がないと見なされてしまう。しかし、表現のバリエーションを熟知しているからこそ、ほかの表現をえらぶことができるるのである。

ある言語を教育するとき、どの言語もそうであるように、ゆらぎのあるものとして提示することが必要である。意味は類似していても、ニュアンスにちがいがあり、議論がおきている語があれば、そのゆらぎをそのまま紹介し、つたえることが重要である。それはまさに、「社会のなかの言語」をあつかっているということを学習者にしめすということであり、ことばは画一的なものではないということをしめすためにも必要なことである。

性規範と言語規範

「ことば」と「女性」で本を検索すると、つぎのようなものが見つかる。

- ・『女性の美しい話し方と会話術—好感を持たれる言葉のマナー』2004年
- ・『美しい女性（ひと）をつくる言葉のお作法』2014年

日本では女性は「美しい」ことをもとめられ、「マナー」や「作法」が重視されている。そのため、このような本が出版されている。このような社会規範、役割期待を内面化している人も一定数いる。

日本語社会において、ことばのマナーであるとか作法といわれるものとして、しばしば敬語がひきあいにだされる。敬語というものについては、敗戦後の日本で「民主主義」があたらしい価値として論じられるなかで、敬語の是非について議論されることがあった。坂口安吾（さかぐち・あんご）が1948年に書いたエッセイ「敬語論」をみれば、当時の状況をうかがいしことができる（https://www.aozora.gr.jp/cards/001095/files/42841_33441.html）。坂口のような文学者ではなく、言語学者は日本語の敬語をどのように論じていたか。たとえば、金田一京助（きんだいち・きょうすけ）は「女性語」と敬語のみすびつきを絶対視していた（やすだ2008:244-254）。敬語のほかにも、「標準語」イデオロギーをあげることができる。「標準語」を「うつくしいもの」とし、「女性はきれいな日本語をはなすべき」という発想がある。たとえば、近年まで地域語としては一般的だった「おれ」や「わし」という、性別をとわない一人称についても、女性はさけるべき（「わたし」というべき）と意識されるようになった。寿岳は「方言では男女共通の一人称というのは大変多い」と指摘し、「「おれ」とか「わし」とかいうことばは、いろいろな地方で男女にかかわらず使われていて、別におかしいことはまったくない」として、つぎのように述べている。

そこへ共通語的な意識の目を導入すれば、「『おれ』はやめて、『わたし』を使いましょう」というようなみみっちい発想になり下がってしまうが、ほんとうは男も女も「おれ」でしゃべっている図柄はとてもあたたかい感じがあってなかなかよいものだ。私は大学時代仙台で過ごしたが、女性の「おれ」ということばがとてもかわいらしいものに聞こえた。男と女の自称が同一だからと言って、荒々しいとか乱暴とか考えることは、偏見の一種以外の何ものでもない（じゅがく1979:79）。

熊谷滋子（くまがや・しげこ）によると、最近は女性の「おれ」自称が抑圧されるようになっている。熊谷は「福島県立南会津高校の生徒が製作したビデオ作品『オレオレ詐欺!?』（『ティーンズビデオ』NHK教育、2007年8月13日放送（約8分））」を紹介している。熊谷によると、この作品は「女子高校生の方言使用、とくに自分のことを指す自称詞として「オレ」を用いることについて」とりあげているという。「先生、先輩、同級生、地域の長老、祖母、母など」にインタビューするなかで、たとえば「先生などは社会に出たときに困るから、「わたし」を使用した方がいいと忠告している」という。そして、世代によって「わたし」が定着してきたと説明している。熊谷は、自分のことばについてもつぎのように言及している。

…私の出身地域（岩手県）の方言では、男女ともに自称詞は「オラ」を使用する。祖母や母は何の抵抗感もなく「オラ」を使い続けていたが、私は高校入学の頃には、標準語を意識し、「わたし」を使い始めた…後略…（くまがい2010:53）。

比較軸としての共通語（標準語）と「るべき女性像」というものが恥の意識をうえつけ、「おれ」とか「おら」といえなくさせている。「るべき女性像」とは、「女性はこのようにあってほしい」「こうあるべきだ」という期待であり、規範である。役割期待として、「女性らしさ」「男性らしさ」がつくられてきた。そのイメージに合致するように、ふるまうことが期待されてきたのである。そのような期待=規範が定着している社会のなかでは、自由な言語行動はとりにくい。規範を内面化してしまう。規範にいやな気分を味わいながら、抵抗しづらい雰囲気を感じてしまう。女性への言語態度の問題である。

「やめろ！」といえる社会環境を

「るべき女性像」という規範は、行動をしばる。そのため、いやだと感じたときに、はっきりといやだと明言することが「女性らしくない」かのような風潮が生じてしまう。『実践するフェミニズム』で牟田和恵（むた・かずえ）は「日常的に用いている言語にかかっているジェンダーの「縛り」」について、つぎのように指摘している。

日本語では、とくに女性の言葉使いには、断定・言い切りを避けることがほとんど強迫的といつていいほど期待される。…中略…相手に何かを要求する、あるいは禁止をする場合でも、子どもやペットに対してでもない限り、女性の言葉がストレートな命令のかたちをとることはほとんどない（むた2000:126-127）。

牟田の問題意識は、「日本の女性たちには、そもそも「ノー」のボキャブラリーがない」という点にある。牟田はつぎのように述べている。

上下関係・利害関係のために、上司や教師にノーと言えないだけでなく、何の遠慮もしなくてよいはずの電車の痴漢にさえ、はっきりと拒絶する言葉を持っていないのだ（同上:125）。

牟田は、「このように、女性からすれば実に腹立たしいほどに、怒りや拒絶の言葉が女性から奪われている事態は、しかし、日本語の本質というわけではない」とし、「実際、方言や、古い言葉ではこのジェンダーの罠をまぬかれている例はいくらもある」とのべている（同上:127）。

『がまんしないで、性的な不快感』という本があるように、不快なことを不快だと主張していいのだというメッセージをつたえていく必要がある。不快感を表現することばは、いろいろなかたちがあつていいはずであり、地域語に学ぶこともできるだろう。「いやだ」と感じたときに「やめろ！」といえる社会にしていく必要がある。いえなかったとしても、まず第一に問題化すべきなのは、いやだといえる関係／状況であったかということである。たとえば醜陋した状態は、いやだといえる状況にはない。圧倒的な権力差があるとき、いやだといえる関係とはいえない。

性差別が常態化することで再生産されるもの

『国語辞典にみる女性差別』という本が1985年にでているように、国語辞典の記述に女性差別が散見されるという状況があった。ことばと性差別についての議論では、女偏の漢字の差別性もとりあげられてきた。国語辞典にせよ、漢字にせよ、男性中心の社会の産物であるといえる。女性を客体化し、主導権をにぎっている側が一方的に他方を描写するということが、これまでの社会であったといえる。そのため、男性優位の視点にたった言論が通用してきたのである。政治の世界においても、研究や言論の世界においても、女性差別を解消していかなければならない。

参考文献

- イ・ミンギヨン（すんみ／小山内園子訳） 2018 『私たちにはことばが必要だ—フェミニストは黙らない』 タバブックス
上西充子（うえにし・みつこ） 2019 『呪いの言葉の解きかた』 晶文社
宇佐美まゆみ（うさみ・まゆみ） 編 1997 『言葉は社会を変えられる』 明石書店
金田一京助（きんだいち・きょうすけ） 1955 『言語学五十年』 宝文館
熊谷滋子（くまがい・しげこ） 2010 「方言の歴史—若い女性が東北方言を使いにくいわけ」 中村桃子（なかむら・ももこ） 編『ジェンダーで学ぶ言語学』 世界思想社、50-65
ことばと女を考える会編 1985 『国語辞典にみる女性差別』 三一書房
寿岳章子（じゅがく・あきこ） 1979 『日本語と女』 岩波新書
寿岳章子 1988 『ことばづかいの昭和史』 岩波ブックレット
ショーン・ビクトリア（村瀬幸浩監修／小形恵訳） 2008 『がまんしないで、性的不快感—セクハラと性別による差別』 大月書店
中村桃子（なかむら・ももこ） 2012 『女ことばと日本語』 岩波新書
中村桃子編 2010 『ジェンダーで学ぶ言語学』 世界思想社
牟田和恵（むた・かずえ） 2001 『実践するフェミニズム』 岩波書店
安田敏朗（やすだ・としあき） 2008 『金田一京助と日本語の近代』 平凡社新書

学生のコメント

この優生保護法というものはなくなりましたが、今でも障害者の人を腫れもののように扱う人が多いように思います。私は実際障害をもつ子どもたちのデイサービスで働いていました。子どもたちは小学生～中学生までいましたが、子どもたちを公園に連れていくと公園にいた人たちに「なんで障害の子を連れてきたの」と口で言わないにしても、すごくジロジロと見られたり、気持ち悪いと小声で言われたりしたこともあります。私もバイト中に知的障害の子に体をたたかれたり、手を噛まれたりしたこともありますが、それでもその子の歳相応くらいの子と同じくらいかわいかったり、励まされたりしたので、そのような目線だったり言葉が本当に辛かったことを思い出しました。障害があってもなくても人間であるという佐々木さんの言葉には本当に共感しました。

――――――
優生保護法に基づいて不妊手術を受けさせられた人々にとって、どれだけ時間が経ってもお金をもらって、「もう10代にはもどれない」という言葉が表しているように許すことのできないものだったということが伝わりました。私の祖母には姉がいて、私が生まれる前に亡くなった祖母のかわりに、私を孫としてかわいがってくれています。先日、祖母の姉から祖母たちには弟がいることを聞きました。その人は、祖母の姉いわく妾（めかけ）さんの子どもで、“知恵おくれ”だったために、20歳ころに施設に送られたそうです。自分の家族で今まで知らない人がいたというのがおどろきでした。

【あべのコメント：映画『レインマン』で「兄がいるなんて、だれも教えてくれなかった」とトム・クルーズがいう場面がありましたね。あの映画は障害者施設からのロードムービーという感じで、よくできています。】

――――――
私の弟は、発達障がいをもっています。母は、彼が生まれる前にその事実を知りませんでした。胎児に障がいの疑いがあると分かり、中絶を選ぶ人がいると知ったのは中学生の頃でしたが、今でも忘れられない衝撃でした。「障がいをもつ親が生きづらい社会」に問題意識をもつべきだと思います。母と同じ境遇に自分がなった時、今の社会に生きる私には正直、自信がないです。映像の中で「耳が聞こえない」ではなく「手話を使う」と表現されていました。人間の心身を「+（プラス）、-（マイナス）」で評価することのない社会を望みます。

【あべのコメント：家族主義がつよいと、子育ても介護も「家族の責任」となってしまうので、身がまえてしまうわけですが、いまの社会保障制度では家族だけの責任にしないことが重視されています。わたしのような訪問介助を仕事にしている人は、家族と同居している人の介助もするし、親元や施設をでて、ひとり暮らししている人の介助もしています。そうなると、家族もたすかるし、介助をうける本人も自分の意識がより尊重されるので、よりよい生活ができます。】

――――――
…友達が手話コーラスのサークルに入っているのですが、SNS上ではろう者の人の交流はないように見えるので、手話コーラスはろう者のためのものではない。

――――――
…ろう学校に関して、教員の配属は知識の有無に関わらずされる為、ろう学校に初めて配属になった時は、半年程かけて死ぬ気で手話を学んだという話を、実際にろう学校で働いた聴者である方から聞きました。あくまでも教師の自主性によるもので義務ではないです。

――――――
「優生思想」に嫌悪感を持っていますが、自分のなかで「もし、自分の子どもが障がいをもって生まれたら…」と恐さを感じてしまいます。こういう考え方も根底には優生思想が存在してしまっているのでしょうか。どこまで自分が子どもを愛せるか、前向きに子育てできるか、どうしても不安に思ってしまいますが、「健常者」の子どもに対してもそれは同じことかもしれません。…後略…

【あべのコメント：優生思想は、根づよいもので、だれでももっているものです。でも、そこでひらきなおるのではなくて、優生思想がもたらしてきたこと、優生思想のせいで現に抑圧されている人がいること、生存が危険にさらされている人がいることを知っておく必要があります。優生思想が極度に支持されてしまえば、かなりたくさんの人が社会の「お荷物」として「生きる価値がない」ものとして、ぞんざいにあつかわれることになります。最近の日本は70才をこえても仕事をつづけるべき、そうでないと生活できないぞと脅迫するようなメッセージをまきちらしています。75才、80才に自分がなったときにバリバリ仕事ができるかどうか。想像するだけでおそろしいことです。】

――――――
…最近反出生主義という言葉を本やtwitterでたまに見かけます。その主義と優生思想との関係が気になりました。